

令和4年度第1回二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会 議事録要旨

日 時 令和4年6月20日（月）14時から17時

場 所 二宮町町民センター 2Aクラブ室

出席者 ○会員

出席 17名

大矢会員、八幡会員（代理出席）、渡邊会員、宮戸会員、石井会員、遠藤会員
齋藤会員、脇会員、中西会員、伊庭会員、原会員、山内会員、野谷会員、
岡野会員、渡辺会員、藤原会員、森会員

欠席 2名

関口会員、小林会員

○オブザーバー 4名

○事務局 教育部長、教育委員会教育部教育総務課 7名

傍聴者 3名

配布資料

- ・次第
- ・資料1 二宮町小中一貫教育推進計画
- ・資料2 小中一貫教育の取り組みスケジュール（令和4年6月現在）
- ・資料3 新しい「二宮町型」義務教育の創造
- ・資料4 令和4年度 想定スケジュール
- ・参考資料1 小松郁夫先生プロフィール
- ・参考資料2 二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会名簿
- ・参考資料3 二宮町施設一体型小中一貫教育校設置研究会設置要綱
- ・参考資料4 二宮町附属機関等が開催する会議の公開に関する要綱
- ・参考資料5 二宮町教育講演会

1 開 会

2 あいさつ

森教育長：本日は、第1回の施設一体型小中一貫教育校設置研究会にお集まりいただき誠にありがとうございます。また、皆様におかれましては、ご多用の中、本研究会委員をお引き受けいただき重ねて感謝申し上げます。教育委員会では、平成28年度より、コミュニティスクールとともにこの小中一貫教育の研究を始め、令和元年度に実施した町民の方々との意見交換会を経て、今日に至っています。意見交換会の成果としましては、小中一貫教育を取り入れることで、小学校と中学校の教員が一丸となって9年間の子どもの成長に寄り添い、また、子ども達も校種の枠を越えてひとりでも多くの人とふれあい、他者を思いやる心を育てる環境が整うことについては、一定のご理解をいただきました。一方で、子ども達が通う学校が変わり、一つの校舎で小中学生と一緒に学ぶことについては、地域や保護者の方々の様々な思いとご意見をいただいたことから実現までには、より熟議が必要であると考えたため、まずは分離型での一貫教育を始め、将来的な一体型に

向けて研究を重ねることとなりました。小中一貫教育は、「子どものより良い教育環境」をつくるために必要なものであり、今年度4月の教育委員会議で「二宮町小中一貫教育推進計画」を議決いただき、5月の総合教育会議の中でも報告をさせていただきました。内容の主な点は、「令和5年度より分離型小中一貫教育を始めること」、「今後の児童生徒数の推移や現在の学校施設の状況を踏まえ、遅くとも令和22年（2040年）までには学校を一つの施設にまとめること」の2つです。本研究会は主にこの2つ目の、将来を見据えた施設一体型小中一貫教育校の設置に向けた研究を具体的に行うもので、教育委員、有識者、そして各学校の管理職・保護者・地区のそれぞれの代表のお立場からご参加いただくこととなりました。この会で研究協議いただきたいことは、義務教育期間に育てたい子どもの力、教育の内容、他の自治体になく二宮の魅力ある学校の姿とその方向性、施設一体型小中一貫教育校の設置時期や場所、規模やそのレイアウト、施設一体型小中一貫教育先進事例に関する事等についてです。今後の研究の進捗によっては、推進計画の見直しも必要かと思いますが、子ども達のより良い教育環境のため、そして子ども達の未来のため、ご理解とご協力をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

3 自己紹介

【小松郁夫先生プロフィール紹介】

事務局：小松先生は、京都大学（学際融合教育研究推進センター地域連携教育研究推進ユニット）特任教授ならびに国立教育政策研究所名誉所員を務められており、学歴と職歴に記載のとおり、数々の職を歴任され、主に国内外の教育政策や学校経営に関する比較研究をご専門とされています。また、小中一貫教育関連情報としては、小中一貫教育をテーマに全国各地で講演を行うほか、平成21年に開校した「小中一貫教育校 京都大原学院」のスタート時にも助言を行うなど、小中一貫教育の分野におかれても精通されています。また、令和元年には二宮町の小中一貫教育研修会（教職員向け）において、「地域と学校で創る小中一貫教育」をテーマにパネルディスカッションの講師を務めていただきました。後ほどの協議の際、ご挨拶とともに、ご講話いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【町長あいさつ(オブザーバー参加)】

町長：皆様それぞれの立場でお仕事もあり、お忙しい中この研究会にご参加いただきまして本当にありがとうございます。施設一体型の小中一貫教育とは何か、学校や地域、保護者の皆様のご意見をいただいて、しっかり検討していきたいと考え、この研究会を設置しました。二宮にとって一番いい学校を、ぜひ、町民の皆さんと一緒に作り、しっかり運営していきたい思いが本当に強くありますので、よろしくお願いいたします。小中一貫の研究は、本日の参加者以外の方にもどんどん情報をオープンにして、より多くの人と一緒に考えたいと思っておりますし、皆さんが今日感じられたことを地域へお持ち帰りになって、より多くの方にこの小中一貫教育校の輪を広げていきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

～各会員自己紹介～

4 会長・副会長の選出について

会長に原会員、副会長に山内会員で決定

5 会長・副会長あいさつ

○ 会長あいさつ

この研究会で会長を務めさせていただく上で、ぜひ、皆さんにお願いがあります。私たち会員自身の後ろには学校運営協議会や地域があり、そうした方々の意見を集めていただくとともに、皆さんの意見や考えをどんどん出していただいで、より良いものを作り上げていきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

○ 副会長あいさつ

この町には魅力的な方々がたくさんおられると感じています。町はポテンシャルが高く、スモールタウンならではの新しいスタイルの学校づくりができるのではないかと強く感じています。学校づくりはまちづくりだと思います。この研究会では、全員がフラットになり話し合えればよいと思っています。よろしくお願ひいたします。

6 協議

(1) 研究会の目的説明

事務局：資料1の二宮町小中一貫教育推進計画は、本年の4月に教育委員会議で議決を受けたものとなります。内容につきましては、小中一貫教育の必要性や、町が考える小中一貫教育等を記載したものとなります。本日時間の都合がございまして計画の詳細を説明いたしません、今後の研究会の基本となりますので、お持ち帰りのうへ、ご確認いただければと思います。資料2については今後の取り組みスケジュールです。スケジュールの話に入る前にこれまでの流れを説明させていただきますと、二宮町教育委員会では、平成28年度に小中一貫教育の導入を検討していくにあつての考え方をまとめ、平成29年、30年の2年間で地域の方や学校関係者、有識者とともに、実現に向けた具体的な研究内容をまとめました。令和元年度には、一体型小中一貫教育校として、具体的な配置案を示しながら、地域の皆様との意見交換に臨みました。意見交換の中では、大きく分けますと、地域の方からは地域に学校を残して欲しい声が多かったです。一方で、保護者の皆様からは、やはり子どもにとっての教育環境、集団性などを重視して欲しいという声が多かったです。本研究会は、そういったご意見を踏まえまして、地域とともにあり、児童生徒にとって最善な教育を行う学校である「小中一貫教育校」を作り上げていくことを目的に設置した研究会です。

(2) 小松郁夫先生による講和

(要旨抜粋)

今後、AIの発達为学校での学びにどう影響をするのか。2040年の早い段階で、量子コンピューターと言われるコンピューターが実用化される。AIの研究やコンピューター自身の研究が飛躍的に進歩している。今までは教師の経験や勘など人間の感性的な能力を使ってきたのに対し、今は機械の能力が人間よりも発達し始めてきている。テクノロジーの発展が間違いなく私たちの生活、それから当然学校にも影響は出てくると考えている。しかし、人工知能がどれだけ発展しようと、人間らしさについてはまだまだAIは追いついていない。

学校という今の形態がいつまで続くのか。どこの国も学校ができてから 100 年以上経っている。伝統的な学校の姿が崩れてきている中で、学校に行かなくても義務教育を受けたことにする時代になってきている。フリースクールがどんなことをしているか調査をしたことがあるが、現状は市町村が設置した学校の方が間違いなくきっちり学びを保障はしている。一方で、学校に適應できない子ども達に無理やり適應させるのは問題であるとの考え方は、日本でも出てきており、公教育の質が変化している。公教育のスタート時点では近代的な国家を作るため、国の担い手として育てるという考えだった。

義務教育段階で 15 歳までに子ども達に学んで欲しい、或いは力をつけさせてあげたい内容の議論が、小中一貫教育の一番の中身だと思う。小中一貫の施設を作ればいいという話ではなくその器を上手に活用した私たちが考える義務教育をしっかりと保障していくことが大事である。

依然としていじめ、不登校問題は深刻であり、解決できていない。様々なハラスメントの問題も学校教育、社会全体の問題としてある。これまでの教育学は、家庭教育、学校教育、社会教育、この三つをそれぞれ論じてきた。それぞれの場のバランスのとれた教育を今後作っていくことが大事である。学校の機能として、学校は子どもの教育だけではなく、子どもの福祉ケアについても考えて保障していかないといけない。

新しい価値を生み出せるような総合的な学習の時間がある。総合的な学習の時間を使い、何を二宮の学校で教えるか、何々学とか何々学習とか、その地域の名前、例えば二宮学習という形で地元をしっかりと学び、子ども達なりの新しい考え方を学んでいくことが大事。

二宮は全国の中でも教育力がある。地域の中に教育のための財産、自然的な財産だけではなく人という財産がたくさんあるので、それを活用した二宮型の全国トップレベルの教育の保障ができる地域だと思っている。教員以外の方による専門的な経験、知見、才能をぜひ生かしてもらいたい。

学校運営協議会では、学校評価などの議論をすると思うが、アンケート結果だけでなく、様々なデータや資料を集め学校の評価をしていくことがあっていいと考える。

小中一貫教育を進めていくうえで、義務教育の質の保障をしっかりと考えていく必要がある。義務教育中のカリキュラムをどうするか。小学校は算数、中学校は数学、小学校は図工、中学は美術という考えはやめた方がいい。音楽は小学校も中学校も音楽である。義務教育で何を特に重点化して保障していくのかは大事なテーマである。社会の形成者として若者をどう育てていくのか、国にとっても大事だが地域社会にとっても大事である。二宮町で育つ人達が二宮町を支え、発展させてくれる人材になるためには、どういう学びを保障してあげたらいいのかを考えていく必要がある。新しい学校施設の中で、子どもだけのための学校施設じゃなくそこで大人も学べるような機能を持たせてもいいと思う。

(3) 意見交換

会長：小松先生からのお話でもう少し具体的にお聞かせいただきたいというところがありますでしょうか。

副会長：先生が二宮町は全国トップレベルの教育を打ち出していけるのではないかと考えていただいて嬉しかったのですが、二宮町のどこにそのポテンシャルを感じておられるのかお考えをお聞かせください。

小松先生：東海道線沿線は、日本の基軸になっており、多くのリーダーたちがこの沿線に住んでいます。知的レベルが非常に高い。今、活躍している方或いはリタイアした世代にそういう人たちがたくさんいらっしゃる。そういう方たちの力を地域の力として活用していただきたい。まちづくりだけではなく、学校づくりに活用でき

るのではないかと思います。

会 長：今後研究会の中で二宮町の魅力を皆さんで確認し、その魅力を学校教育、学校づくりに変えるか、活かしていくのか、そんな話し合いもできればと思います。

会 員：分離型から始め、いずれ一体型を考えている中で、先生から見て分離型でできることについてご意見があれば伺いたいです。

小松先生：二宮町としての教育方針に基づき、小学校3校同士、中学校2校同士などの横の連携をより意識し、問題に対して共通に研究をしながら進められたらいいと思います。教材づくり、校則の見直し、今の教育テーマに関すること、合同の研修や交換授業をしたり、部活も合同でやってみたりなど。部活の地域移行が進むのであれば、地域全体でスポーツ活動及び文化活動を奨励していければいいと思います。京都大原学院では、子育て世代の孤独・孤立対策として、空き教室を活用して、悩み事相談やイベントなどを開催するなどの工夫を行っています。二宮は二宮らしい活動を取り組んでいければいいと思います。

会 長：分離型が来年度から始まるのであれば、その成果や課題を共有する中で、一体型の中でその課題や成果をどのように活かせるのか、どう改善したらその課題が解決に向かうのか、そんなことを、話し合えたらいいのではないかと考えています。二宮町が分離型を始めることを十分に意識しながら、一体型に向けて、研究を進めていただきたいと思います。

小松先生：小学校も中学校も町が設置者でありベースが一緒なので、施設が分離したままでも内容的に連携を深めていければいいと思います。学校には校内文化があって、ちょっとした文書処理だけでも違います。私に関わってきた小学校でも、8月25日から2学期が始まる学校もあれば、9月1日から始まる学校もあるなど学校によって様々な違いはあります。できるところを統一していただきながら、洗いざらい課題を出し、いいところを議論しあって進めていければいいと思います。分離のままでも統一できるものは統一していき、次にハードに取り組みばいいと思います。新しい建物は先だけど、中身は一緒になり、これが二宮の学校だねというようになるような取り組みをすればいいと思います。

会 員：計画では、令和5年度に分離型がスタートして、令和22年度を目途に施設一体型となる流れが記載されていますが、こんなにも時間がかかるのは果たして計画と言えるのでしょうか。京都大原学院の小中一貫校については、検討を始めてどれぐらいの期間で小中一貫校になったのでしょうか。

小松先生：4、5年ぐらいで結論を出したいと思います。ただ、幸いにして小学校と中学校の施設が隣にありましたので、そこまで時間がかからなかったのだと思います。

会 員：できるだけ早く課題解決に向け進めてほしいと思います。

小松先生：私は、横浜市の学校適正規模等検討委員会の委員長をしています。そこでは教育委員会の基本方針に基づき、各学校で検討委員会を作り、2年間程度地域の方と議論していただきます。それらの議論結果を踏まえ、私たちの委員会で検討し、教育委員会に答申を出すまでには、5年ぐらいはかかります。ただその辺はいろんな事情もあるでしょうから、地域によって様々だと思います。

会 長：小松先生から2年という数字が出ましたけれども、この研究会も任期が2年間となっています。この期間で提言をまとめて教育委員会に提出したいと思います。

会 員：学校の形態が変われば評価の仕方も変わっていくのだと思います。評価に関する将来的な展望がありましたらお聞かせください。

小松先生：昔は教師中心に考える教育評価を使用していましたが、今は、子どもが何を学ん

だかを評価する学習評価に変わってきています。学習評価は複雑であり、従来の知識理解に加え、思考力、判断力、表現力等については非認知的な部分まで評価することになります。また、相対評価ではなく、絶対評価としての評価論が強くなってきています。絶対評価は入試での合否の線引きの判断の難しさ、それから、35 人学級、40 人学級において、一人一人本当に丁寧に見ないとできないため、ものすごく難しい手法だと思います。

会 員：5とか4とか3という点をつけて通知表としてみんなに配ることについてはどうお考えですか。

小松先生：評価は教師がどの程度教えられたのかが分かるのと同時に、学習者の理解度の自己評価にもつながります。日本の子どもは、世界的に比較して自己肯定感が低いと言われているので、自己評価では評価の低い人たちになってしまうため、それらの考え方から見直しが必要だと考えます。

会 員：日本の産業界は 20 年ぐらい止まったままで、日本人は決められたことはできるのですが、価値創造ができないと言われていています。基本的なところを学びつつ、その応用、或いはもっと先のこと考えられるようなバランス感覚を、小中一貫の中でどのようにやっていけばいいのかを教えていただければと思います。

小松先生：基礎段階では、漢字が読める読めないとか、計算ができるできないとかの知識の習得ができた上で、だんだん自分なりの判断や表現ができるようになります。小学校段階では、基礎が7、8割ぐらいで、残りが創造部分になりますが、果たしてそれでいいのだろうかという議論はあります。また、個別最適な学びというキーワードがありますが、一人一人、発達段階によって異なるため、教育って正解があるようでない。だからいろいろやってみるしかないと思います。教育は極めて多様性があって、変動性があって、だから面白いんですけど、みんなで知恵を出してやっていくしかないと思います。学校の先生はその世界しか知らないの、その先生たちが経験してない世界を持った地域の人たちが、こういう世界もあるよということを学校の中に注ぎ込んでいただくのが、地域とともに作る学校という考え方だと思います。

会 員：二宮町がこれから小中一貫教育というキーワードで、どんな教育の場を作っていくかという議論を積み重ねていければいいと思います。この小さな町の可能性として、地域も交えながらこんな学校にしていきたいということが土台から生まれ、それを実現する手段みたいなものはあるのでしょうか。

小松先生：同じ空間に集めることによって子ども同士の間での学びがあります。学校のメリットは集合して同じ空間、時間を共有するということです。それが今、例えば不登校とかいじめとか、或いは学校というシステムに合わない子どももいます。一方で、1人で生きていけるのかというと、私たちは社会の中で自分と違う人とどう共生していくか、それを学ぶ必要はあると思います。私が見に行っていたいろいろなフリースクールには、成功ケースはもちろんありますが、そんなに多いとは言えません。間違いなく学校のようなシステムの方が効率的です。

会 員：カリキュラムを自由に取捨選択できるような仕組みを、学校の中に取り込むような可能性はありますか。

小松先生：その可能性はあると思います。次の指導要領の改訂が始まっているのですが、内容ががらっと変わってしまうと、教科書会社等への影響もあるためなかなか難しいらしいのですが、学問の体系の全体を変えるくらいの思い切りが必要だと思います。

会 員：専門分野はすごく得意ですけどちょっとずれると応用がきかない、それが今の子供たちの姿だなと思います。もう1個は目標設定が苦手なので、小中一貫に期待するのはやっぱりその部分をちゃんと抑え、少し先の先輩を見ながら、目標設定をちゃんとしていけるような子供たちに育てて欲しいなと思います。

小松先生：私も全く同感です。日本の社会、特に教育界は教員の問題で言うと、真っ先に指導力不足教員を見つけて処分するという感じばかりで、優秀な教員を見つけて表彰して給料を上げるみたいなシステムがないです。能力不足、教員の再教育みたいなことばかりが表にでできます。日本の社会は減点主義になっています。

会 長：地域の皆さんの力が、子供たちを育てるということが、今日のお話でよくわかったと思います。今日ご発言されなかった皆さんもまた今後の会議の中で、ぜひご意見を伺えればと思います。以上で意見交換を終わりたいと思います。

(4) その他

事務局より事務連絡

7 閉会